

見えない犬のなぞ

E・W・ヒルディック／落沢忠枝訳／山口太一画





* 作 者

E・W・ヒルディック

* 訳 者

ふき ざわ ただ え
落 沢 忠 枝

* 発行者

岡 本 陸 人

* 印 刷

新興印刷製本株式会社

錦明印刷株式会社（オフセット）

* 製 本

中央精版印刷株式会社

* 発行所

株式会社 あかね書房

東京都千代田区西神田 3-2-1 〒101

電話 東京 263-0641（代）

振替 東京 3-64150

1979年3月10日第1刷

NDC 933

8397-13006-0027

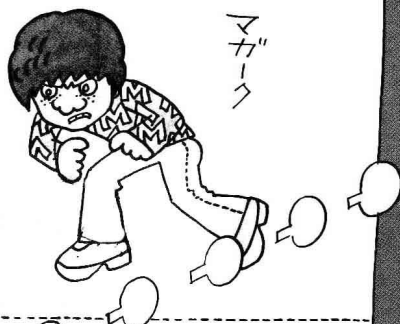
見えない犬のなぞ

落 沢 忠 枝 訳

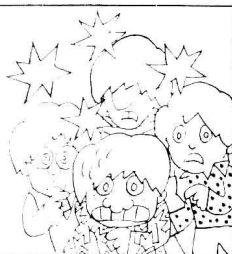
あかね書房 1979

161p 20cm（マガーク少年探偵団⑥）

見えない犬のなぞ

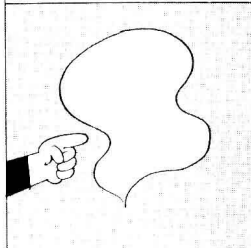


あーん



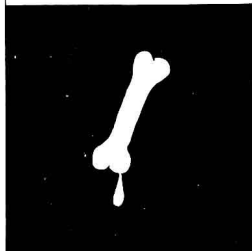
すかた
け
次
消し
機
す

36



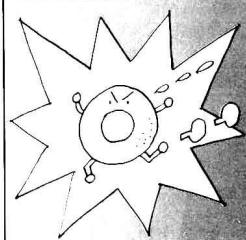
ぬ
れ
た
骨
ほね

44



ドーナツが
にげていくぞ

6



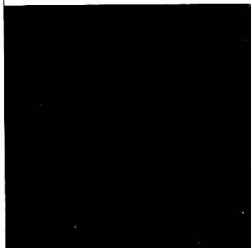
幇相の中

26

ス
ニ
ス
すかた
次
を
お
ら
ぬ
す

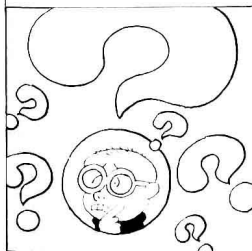


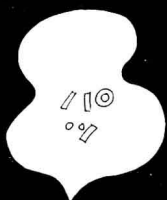
58



故
障
しょう

68





ふたたび
犬の姿が
消える

.....
144

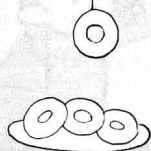


五人目の
団員

.....
154

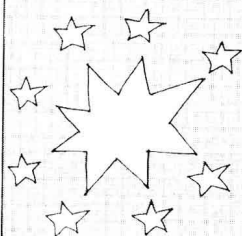
草の山積み

.....
115



ぼくらの
千カース！

.....
136



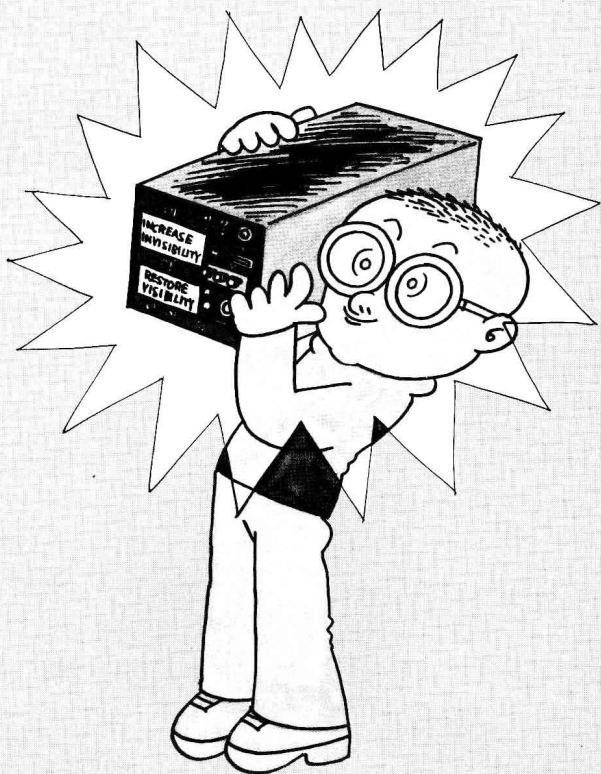
失せ物
ー見えない！犬一匹

.....
86



捜査

.....
98



E·W·Hildick

THE CASE OF THE INVISIBLE DOG

Original Copyright © 1977 by E·W·Hildick

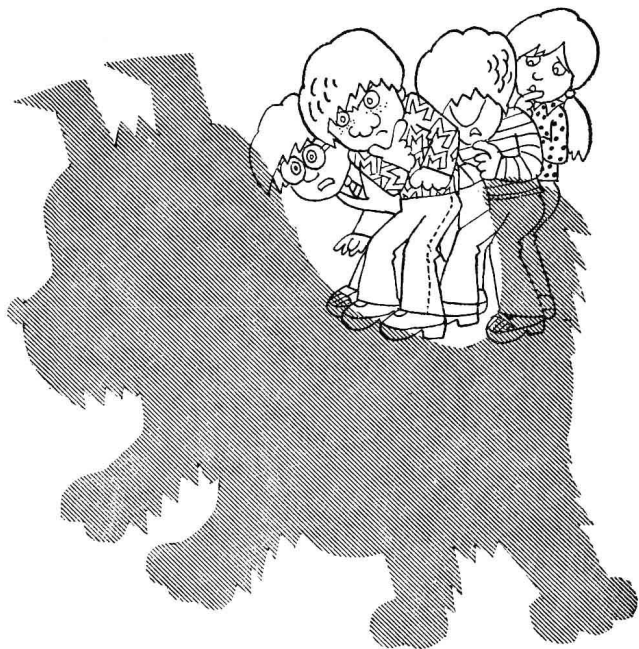
Japanese Copyright © 1979 by Akane-Shobo Co.

Japanese translation rights arranged

with Jennifer Luithlen

through Japan UNI Agency, Inc.

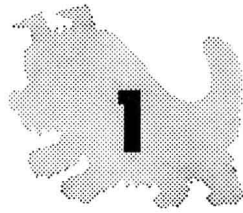
見えない犬のなぞ



E・W・ヒルディック

落沢忠枝訳

山口太一画



ドーナツが

にげていくぞ

発足して数か月、すでに五つの謎をといたマガーク探偵団。さて、第六話ではどんな事件が待ちうけているのかな？

あれが、最初だったな。姿の见えない犬を、ぼくらがはじめて見たのは。そうだ。マ
ガーク探偵団の、ピクニックの日だった。

訂正……。

今のは、まちがいだった。姿の见えない犬を、ぼくらが見なかったのは、と訂正する
よ、もちろん。

ぼくらが見たのは、ほんとうは、ドーナツのにげていくところだった。——ピョンピ
ョンとんだり、フラフラゆれたりしながら、草の中を走っていった——ぼくらのテーブ
ルから、やぶの中へとね。



ときどきは、草の上だろうと、とてもはや
く走った。また、ときどきは、草の上の空間くうかん
を、もつとはやく走った——地面じめんから五、六
インチやう（約十三〜十五センチメートル）のと
ころを、ビューッとふつとんでいった。

とても信じしんられない。

「ひえー！」

マガークが、マグロ・サンドイッチを、ほ
うばったままさげんだ。

「あれ、なんだい——？」

そのまま二の句くがつげず、口あんぐりで、
大将たいしょうは、目をパチパチ、パチパチさせた。

「どうしたんだ？」ウイリー・サンドフスキ

ーが聞いた。「きみ、まるで——」

と言いかけて、こんどは彼がポケンとなった。口のそばまで持っていたピーナツ・バター・サンドイッチが、長い鼻のさきでストップ。手がきゆうにピクンと引きつって、動かなくなった……アリヤ……アリヤ！ ドーナツがにげていくよ！……ウイリーも見たんだ。

「二人とも、まるでどうか——」

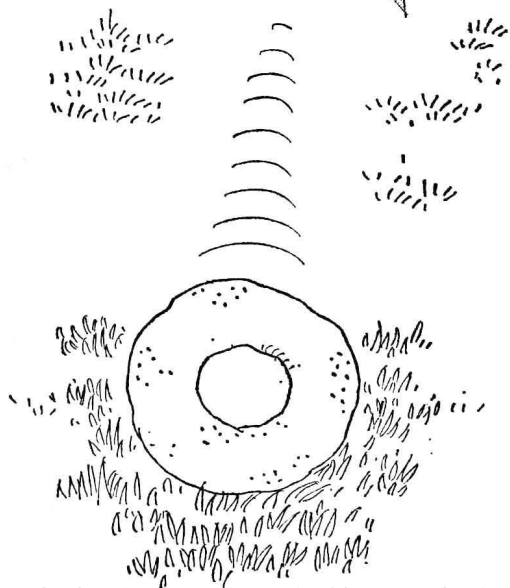
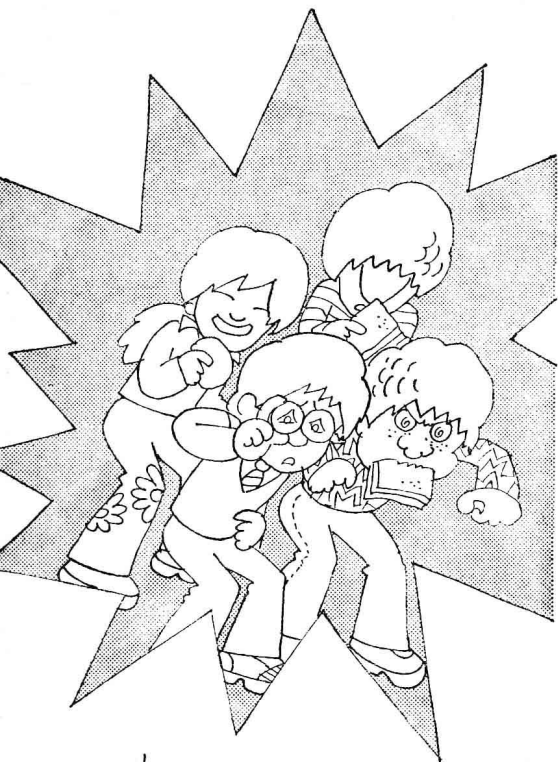
ワンダ・グリーグが言いかけた。彼女は、お、や、きを手にとって、いたずらっぽく目をキラキラさせていた。が、きゆうに光が消えて、目が細くなった……あら！ あら！ ドーナツが、ピヨコ、ピヨコとんだり、ヒヨイ、ヒヨイはねたりしながら、やぶのあいだを走りぬけて、おとなりの庭へはいっていくわ！……。

ぼくはだまっていた。ぼくは、眼鏡をかけているので、焦点を合わせるのがおそいんだな。ことに、太陽がキラキラしているときはね。

それで、たぶんぼくは、一番さきにドーナツを見つけたんだけど——テーブルから、

ほんの四、五フィート（約一・二—一・五メートル）のときね——ぼくは、目がおかし
いんだと思って、だまっていたんだ。

そして、みんながさけんだり、あえいだりしたとき、やっと、目のせいじゃなか
ったと知ったんだ。日光のいたずらじゃない。やつぱりほんもののドーナツが、いのち
からがらにげていくんだ……。



だけど、まず、きみに状況を説明しよう。

1、場所——マガークの裏庭のはずれ。ピクニックのごちそうが、木の下のテーブルに、ひろげてある。木の幹はテーブルの左側にあつて、そのほかは、あたり二、三十フイート（約六、九メートル）四方、影一つない。

でもドーナツは、左側に動いていった。ここには、まだらな、短い草のほかはなにもない。

だから、姿の見えるけものか、子どもが、近くのやぶから手を出してかつさらい、それを持って、背の高い草のあいだを走っていくのとはちがう。

2、時——晴れた夏の真昼。明るさには一点のかげりもない。

3、場合——まえに言ったように、マガーク探偵団の年中行事のピクニック。まだぼくらは、発足して数か月にしかないけど、マガークは、ごたいそうな名前をつけた。

「え、年中行事のピクニックだって？」と、ぼくが言った。

「そうとも」マガークが答えた。「なぜいけないんだ？　ぼくらは、めでたく五つの謎なぞに成功せいこうしたんだぜ。お祝いわいだ。そうだろう。だからその割わりでいけば、五回、年中行事のピクニックができるってことさ」

さて、ところが、どうやら今、六つ目の謎なぞがやってきたらしい。

マガークは、それを感じていたようだった。

「はやく！　はやく！」彼は、手に持っていたサンドイッチをほうりだしてさげんだ。

「あのドーナツを追おうんだ！」

ワンダとぼくは、パツと走りだした。マガークとウイリーは、テーブルのむこう側がわだったので、おそくなった。でも、やぶのそばまで来たときに、マガークは先頭せんとうになっていた。そこは、おとなりの庭にわとの境さかいだった。

「おおっ！」

彼はきゆうに立ちどまって言った。

さて、そのひと声だが——まったく、書きにくいんだな。きみもそこにいて、マガー

クのあのひと声を聞いてはしかったよ。

最初は、一種のキャン！ というほえ声のようなひびきがあった——ちようど、犬が足をふまれたときに、立てる音のような。

それから声は、ゆるく低く——犬が、人の足音を聞いて、あやしんだときに出すようなね。でも、それも長くはつづかず、犬がとほうにくれたすすり泣きのような声になつて消えた。

字で書くと、まあ、こんなふうかな——。

オオッ——アアアルル——ウウウツ？

理由は？

ブレインズ・ベリンガムだ。

ブレインズ・ベリンガムが、そこに立っていたんだ。となりの庭に、小犬の首輪を左手で持ち、右手には、くしゃくしゃにからだドーナツを持ってね。小犬はせかせかからだをのたくっていた。



「マガーク、ごめんよ」と、ブレインズが言った。「ぼくは、きみらのけちなピクニックのじやまさせるつもりはなかったんだ。ほんとになかったんだよ。でもこいつが、どうしても、ドーナツの魅力に勝てなかったんだ。そうだろう、デニス？」

「キャン！」

犬はもがいて、ドーナツののこりのほうに、また手をのぼした。

「ウウウ！」

「ほらね？」ブレインズは、デニスを草の上に置きながら言った。「ぼくはこの二日間、おばさんといっしょにいるあいだ、こいつの

ことがよくわかってきたんだ。ぼくの両親は、シカゴへ用事で行ったんでね——」

「それは知ってるよ！」マガークが、じれったそうに言った。「でも——犬が——ドーナツを——」

「そうとも」と、ブレインズが言った。「それを今ぼくが、説明したじゃないか。デニスは、ドーナツが好きで好きで、つい、ぬすみさえするんだな。チャンスを見つけると、————またもや——ごめんよ、たった今、こいつをはなしちゃってさ。まったく、ぐうぜんだったんだ」

ブレインズは、あやまるように笑った。しんから、悪いと思っっているらしい顔つきだった。大きな眼鏡のおくで、目がパチパチはやくしばたいていて、まっすぐぼくらのほうを見ないんだ。それだけでも、ふつうじゃないよ。

いつものブレインズなら、じいっとぼくらを見つめるのが、おきまりだからね。——大胆不敵に、批評家よろしくに、じつと——あの九歳の坊やの顔の中で、目だけは、すごいインテリの大人のような、すんだ、グレー（灰色）のひとみでね。

「だけど——だけど——」

マガークの緑の目には、ありありと、ろうばいの表情がうかんだ——。

「だけど——」

とうとう、ワンダがかわって言いだした。

「だけど、ブレインズ、あたしたち、犬は見なかつたわよ。ただ——ただ——」

そこで彼女も、パツタリことばにつまった。

「ただドーナツしか」と、ぼくが言った。

「草の中を、ころがっていくところしか」ウイリーが、どもりながら言った。「自分

——自分でかつてにさ」

ブレインズは、ますます人目をはばかる、こそこそしたようすになり、犬の上にかがんで、頭をなぜながら、

「そうか。なるほど」と、つぶやいた。「デニスは、こんなに小さな犬だからね——おい、そうだな？」